

# パストラーレ通信

西洋医学の黎明期 今、昔

2014年 新春号



## 新春を迎えて

理事長 渡辺 好章

東日本大震災による津波や原子力発電所事故の被害の余韻は、東北地方を中心にさまざまな局面でいまだに続いています。新春を寿ぐ前に、犠牲となられた方々にここに謹んで哀悼の意を表します。また、この震災で今もなお故郷を遠く離れて居住せざるを得ない被害を受けられた方々にも心よりお見舞い申し上げます。地震大国のこの国に生きる私たちは、このような機会に非情な大自然の摂理を改めて考える必要があると思います。また、この自然とうまく付き合いながらも大災害の記憶を後世に伝承していくことが私たちに与えられた任務であると思います。



昨年のご挨拶においても触れましたが、このような大きな衝撃を造り出した張本人である自然界は、まるで何事もなかったかのように時間の歩みを着実に進め、気がつけばもう3回目の新しい年を私たちは迎えています。大自然の持つ懐の深さに畏敬の念を抱きながらも、この大自然に包まれた生態系を生き抜いていく難しさを改めて強く感じる次第です。

さて、皆様はどのような新年をお迎えになられたのでしょうか。心新たに今年の目標や抱負をお考えになられた方も多いと思います。今年も心穏やかに過ごせる良い年としたいものです。今年は本法人にとりましても、新たな第一歩を踏み出す節目の年となります。数年来、取り組んでおりました活動が認められ、本法人は4月から公益財団法人として新たなスタートを切ります。この認可に至る経緯は、理事会、評議員会で逐次報告させていただきましたように、いくつかの懸案を克服しながらの申請作業を行ってまいりました。これらの過程における関係者各位から頂きましたさまざまな心強いご支援に対しまして改めて感謝申し上げます。

公益財団法人とは文字通り、利益目的ではない公益に関する事業によって広く社会に貢献することをその活動の主旨とする団体に与えられる法人格です。そして、このような法人に対しては社会からも非常に高い信頼が寄せられることになります。そのため、本法人には従前よりさらに厳正な業務遂行と同時に、より積極的な公益活動の展開も求められることになります。本法人の中核事業である免疫療法の研究とその成果の実践は、社会への公益性に大いに寄与していると自負しております、今後ともその継続的な展開を行っていく所存です。さらに、冒頭に述べました東日本大震災によって被災された方々への支援につきましても、公益法人としてより積極的に取り組むべきものと位置付けております。そのため、本法人も震災直後から研究員を被災地に派遣し、科学的知識を基盤とした放射能汚染への対処を中心とした被災者向けの啓蒙活動を行ってまいりました。今後も、研究活動で得られた成果の社会還元の一環として、震災被災者の方々への支援を継続して展開してまいります。

会員各位におかれましては、公益財団法人としての本法人の新たな出発に対しまして、引き続きご支援賜りますようお願ひいたします。

# 京都から全国へ伝播した 西洋医学の衝撃波

## —明治維新と 日本近代医学のビッグバン—

(財)ルイ・パストゥール医学研究センター

藤田 哲也



慶応4年(1868年)正月4日、鳥羽・伏見で幕府軍と薩摩・長州の連合軍との間で突如として鉄砲と大砲の撃ち合いが起こります。これが戊辰の役(明治維新)の始まりでした。信じがたいことながら、長期に政権を握り、その間、資金もずっと豊富であった徳川幕府のほうは、多数の下級武士の持つ銃が、大半、時代遅れになっており、銃撃戦の訓練も十分できていない状態にありました。その上、幕軍戦力の中心であるはずの武士階級は銃砲による戦いを軽蔑する傾向が強かったのです。例えば、最強の戦力と皆が信じ、頼りにもされていた新撰組は断固として鉄砲を使うことを拒否していました。一方、薩長兵のほうは半農民を中心とする新興勢力で、非常に新しい銃砲を持ち、徹底的な銃撃戦訓練を受けていました。その差は歴然です。両軍が鳥羽・伏見で遭遇して壮絶な撃ち合いになったとき幕府側は簡単に負けてしまい、薩長の方は一挙に大阪まで攻め込んでいくという状況になりました。この間の戦闘の結果、莫大な数

の戦傷者が出ました。幕府側に比べ薩長方には手負いの数が少なかったとはいえ、その傷の多くは重症でした。

そのような状況の下で、今から146年前、ともかく西洋医学というものがどんなに凄いものであるか、新しい日本政府の要人たちや伝統医学の医師たちに強く印象づける機会が訪れたのです。

慶応年間、薩摩藩は手回しよく6千坪強の薩州屋舗と称する兵営を市内中心部に用意していました。それは、御所の横で、現在は同志社大学神学部や女子大学になっていますが(図1)、その裏手(北側)には養源院という相国寺の塔頭がありました。それが薩摩の檀家寺で、そこへ重傷を受けた薩摩の兵士を収容したのです。銃と大砲によって、150人以上の兵士が、今まで見たことのないような複雑で重篤な銃傷を受けて運び込まれ、呻吟しながら寝かされていましたが、そこに集まった薩摩藩の医者は、傷を焼酎で洗い膏薬を塗るとか包帯をする程度のことしかできず、どうにもできな

い間に傷口が化膿・腐敗し敗血症が進行して次から次へと死んでいく地獄のような状況になっていました。

その薩州屋舗には、西郷隆盛とか、西郷従道とか、大山 巖とか、藩主、島津忠義らが集まって鳩首協議していたのですが、既に維新が勃発してから3週間も日を過ぎ重傷者がどんどん死んでいくのに、その人たちに対して姑息な手段で手当てをしたり、言葉で励ましたりする以外、なすすべもなかったのです。焦燥と絶望感は極限にまで達していました。その医師団の中には、石神良策という薩摩藩のトップの医者もありました。彼は、初めて明治2年東京大学が設立されたときに最初の取締(学長に相当)になった人です。

多数の藩医が召集されていました。その中に高木兼寛、ご存じの方もあると思いますけれども、後に海軍軍医総監になり、退役後、慈恵医大と有志共立東京病院看護婦教育所を創った人です。彼も薩摩藩の見習い医師でしたが、入門2年目でしたから、今でいうと医科大学2年生ぐらいの感じで、「もうおろおろするばかりでどうしようもなかった」というようなことを後に回想しています。

さらに、これを見ていた人の中に、明石博高(ひろあきら)がいました。彼はこの後に、京都府に出仕して、参事・槇村正直(まさなお)と力を併せ、山本覚馬も一緒になって、府立医大の前身となる医学校を何とかして創ろうということで目覚ましい活躍をします。それから、高橋正純という人もおりました。彼は、この後、間もなく大阪大学の

前身である大坂府病院の院長になって、西欧医学を大阪に定着させるのに大きな貢献をするのです。

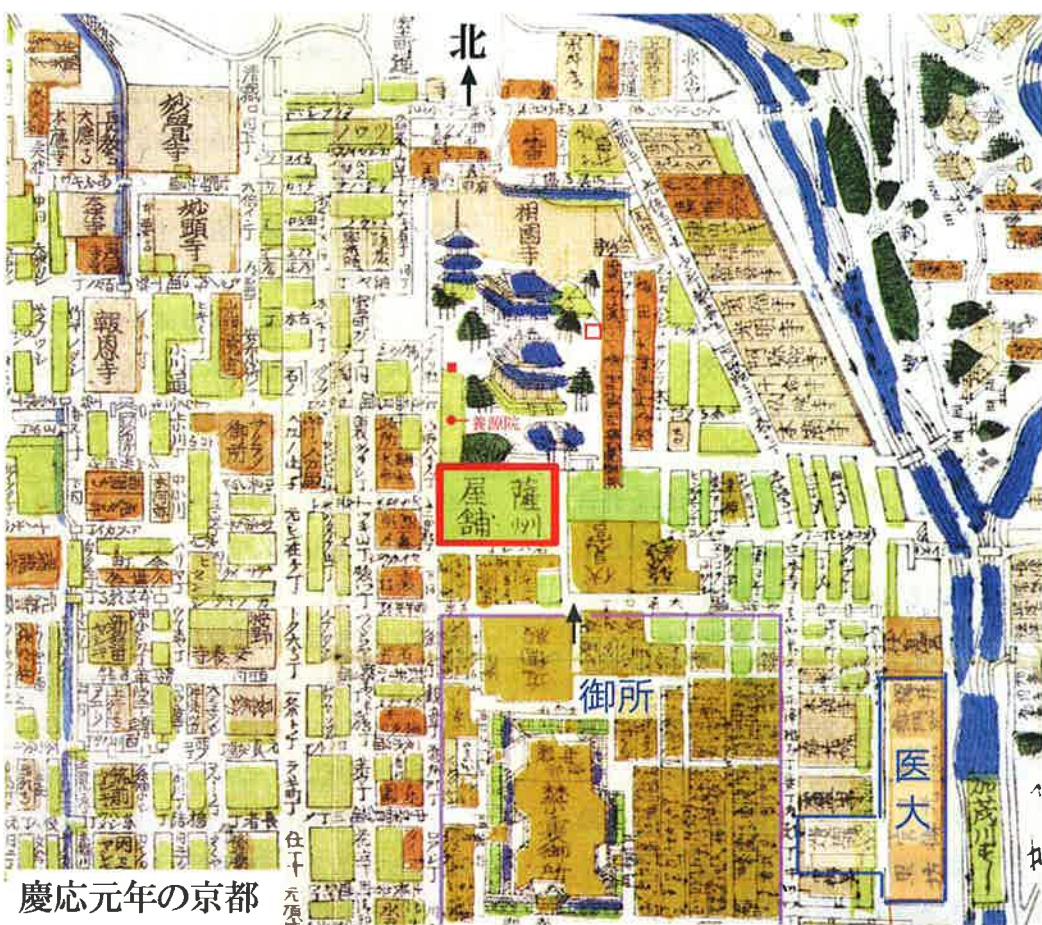
そして、ここへ呼ばれてきたのが、ウイリアム・ウイリスです。イギリス人で当時31歳。大山 巖らが大阪に呼びに行ったのですが、彼は領事館付の医師として神戸へ軍艦に乗って来ていて、そこから京都へ呼ばれて来たのです。その途中、大阪城が炎上しているところを通ってきたというような生々しい体験を、家族への手紙に書いているのが残っています。

そこで、この薩州屋舗の場所の近辺(図1)をちょっとお見せしたいと思いますが、これは当時の京都の地図で、北西(左上)のほうから流れ込んでいるのが鴨川です。上右(北東)から来ているのが高野川。このデルタ地帯が下鴨になります。右下の方に青の線で囲んだのは現在、京都府立医科大学のあるところです。地図の真ん中、中太の赤線で囲んだのが薩州屋舗で、中央下の紫の細線の大枠が御所です。薩州屋舗へ行くのは、今出川通りのバス停「同志社大学前」に御所の北出口(↑)があります。この出口の向かい側に真っ直ぐ北に行く道がありますが、両側は現在同志社大学です、左側は同志社大学の神学部と本部ですが、これが薩州屋舗の跡です。さらに北へ行って相国寺の門をくぐると、この旧薩州屋舗の裏手(北)に当たる所に養源院があります。今でも養源院は昔のままです。ここへ来て、左側を見ると養源院。その少し奥に墓地(■)があります。実は、私が学生の頃に何回かここを探訪に行ったときには、たく

さん薩摩の兵士の墓がありましたけれども、今は全部それが集められて、無縁塚のような形で大きな薩摩兵士の墓標が立っているだけです。そこから少し東（地図では右）に行くと小さい四角の赤枠で示された個別の墓地があります。

ここで、道案内が一渡り済んだので、養源院にウイルスが到着して腕を振るった時点に話を戻したいと思います。彼は、到着するやいなや、休む間もなくてきぱきと重症の患者を診察し、最新のクロロフォルム

の麻酔を使って、直前までわめいていた患者を一遍に静かにさせ、過マンガン酸カリ溶液で消毒しながら、次々に腕や足を切断したり、腐敗した病巣を切り開き異物や骨の断片を掘り出して傷を縫い合わせたりする鮮やかな外科的処置を見せました。それを目撃した官軍方の各藩の要人や、伝統的な日本の医学しか知らなかった医師たち（中には自称蘭方医もいました）が受けた衝撃は本当に大きなものでした。その場に居合わせた人々は、何とかこの西洋医学を



●図1

自分たちの所にも導入したいと、各地で、勢力的に運動を始めることになったのは当然といえば当然でした。

この後ウイリスは薩摩藩に従って遠征し、会津を廻って、東京に凱旋してから新設東京大病院の院長に任命されました。ただ、明治2年に政府の方針がイギリス依存からドイツ医学採用に変更され、東京のポジションをドイツ軍医ミュラーとホフマンに譲りましたけれども、彼自身お気に入りの、もっと設備の整った鹿児島医学校の校長に転身しました。ということで、全国的に見て、鹿児島から東京に至る、日本の西と東の医学系の学校に関係する人たちは、このとき強烈なインパクトを受けて、一挙に西洋医学導入に向けて動き出したわけです。これが、明治元年の日本近代医学のビッグバンといえるものでした。

一方、京都では、何とか早く医系の学校を創ろうということでしたが、ともかくお金がないし政府の後押しません。そこでいろいろと工夫して、有力なお寺さんと花街から寄付を集めて、民間主導で医学校を創ろうということになりました。実質的な主導者は、参事・槇村正直、明石博高、山本覚馬ら三人でしたが、仏教界からは永觀堂の東山天華、金閣寺の伊藤貫宗、銀閣寺の佐々木雲巖、本願寺岡崎別院の与謝野礼巖（与謝野鉄幹の父）の四人が中心となり、有名寺院を網羅する勧説方ができました。そのメンバーは清水寺、東本願寺、建仁寺、安養寺、南禪寺、大雲院、妙心寺、天竜寺、醍醐三宝院、知恩院、蛸薬師空也堂など、67ヶ寺と記録されています。一方、花街の纏め役は祇園

一力の杉浦治郎右衛門が務めました。

寄付は府を挙げての努力で順調に集まり十数万両に達しました。しかし対政府との交渉に時間がかかり、明治4年になるまで計画は具体的に実を結ばなかったのです。ついに明治4年、開校が許可され、招聘手続きも終わり、翌年9月にフェルディナンド・アーダルベルト・ヨンケル・フォン・ランゲックというドイツ人医師が初代の教師として京都に到着しました。ドイツ人と言いますけれど、彼はオーストリア生まれで、この時点ではイギリス国籍の人です。時に44歳でした。

ヨンケルはヴィーン大学で哲学と法学の学位を取った後に医学部に入りまして、1853年に医学部を卒業しています。この1853年というのは、西洋史をご存じの方にはおわかりだと思いますが、トルコとロシアが争ったクリミア戦争が始まった年です。イギリスは一年後に参戦します。この戦争はナイチンゲールが従軍看護婦を率いてトルコのスクタリの軍病院に行つたことでも有名になっています。ヨンケルは卒後2年の間、その戦争とは無関係に、オーストリアで卒後研修を続け、内科、外科、産科、眼科の専門医の資格を取っています。

それらの資格を得てからも、暫くヴィーン市内の病院で医学修練をしていましたのですが、1859年にはイタリア統一戦争が始まりました。この戦いでイタリアが主に敵として戦った相手はオーストリアでした。彼はこのときに志願して、1859年6月1日付の辞令をもらい、北イタリアのソルフェリーノに近いTreviso（トレヴィゾ）の陸軍病院に軍医中尉として着任しています。

有名なソルフェリーノの戦いが間もなく6月24日に勃発します。オーストリア側が17万人、フランス・イタリア連合軍が15万人の兵士というように、膨大な数の軍勢を集めてソルフェリーノで激突したのです。歴史に残る大激戦でした。かつて使われたことのない高度な性能をもつ兵器の撃ち合いになったわけです。両軍とも五百門に近い大砲を揃えていましたし、フランス軍は、大砲の軸の中にねじを切った命中率の高い新型の大砲を投入していました。最後に猛烈な風雨の嵐になり火薬が使えなくなった後の肉弾戦もすさまじく、莫大な数の兵士が死傷する結果となりました。

このとき、敗走したオーストリア軍の側だけでも2万5千人ほどの重症者が出て、そのうちの5千人ぐらいは死んだとされています。先ほど150人もの薩摩兵が京都で重症になって大騒ぎになったことをお話しましたが、何と数万人とか数千人というような、ものすごい数の人がこのソルフェリーノで重傷を負い死んでいったのです。この戦闘は午前6時頃に始まり15時間続いたとされています。いまだかつてなかった殺りく戦になったということです。

たまたまこの場所に、アンリ・デュナンというイスス人が、民間人として来ていて、救援活動をしました。その目撃体験から、近代戦というものが、如何に悲惨であるかということを、詳しく書き「ソルフェリーノの思い出」というルポルタージュとして出版しました。これが一大センセーションを巻き起こし、国際赤十字がつくられるきっかけになりました。この「思い出」の中には、軍医や看

護婦もどのような極限的状況に曝されたか具体的に書かれています。

このソルフェリーノの戦いに、オーストリア側の軍医としてヨンケルが参加していたわけです。この惨状を目撃・体験したのは、その時にオーストリア軍を指揮していたオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世も同じでした。彼は心底、恐怖を感じましたし、フランス軍を指揮していたナポレオン3世もこの結果の悲惨さに仰天して、直ちに講和の話合いを始めました。

ちょうどタイミングよくそこへ、アンリ・デュナンが、お互いに傷病者を攻撃するようなことはやめようではないかという提案をしたので、ジュネーブ条約が成立し、1864年には17ヶ国が批准して、国際赤十字ができました。一方、ヨンケルはヨンケルで直ちに「何とか軍務をやめさせて欲しい」ということを軍司令部に申し出ています。

この辺の事情は、眼科医でもあり医学歴史家でもある奥沢康正先生が現地へ行って何遍もオーストリアやプロシアの記録を調べられて、初めて詳しくわかつてきました。例えば、1859年6月1日に、彼がトレヴィゾへの派遣辞令をもらって着任した事実とか、間もなくそこからヴィーンへ逃げて帰ってきて「何とか兵役をやめさせてください。もう身も心もぼろぼろです。」というような手紙を司令部あてに書いている文書を発見しておられます。先生は、この軍務がヨンケルにとって劇的な心境の変化を来たした時期であったことを明らかにされました。ただ、どういう理由で彼の心境がこんなに一変したのかわからないというふうな

こともレポートに書いておられます、これは、ソルフェリーノの戦いがあったという事実に照らせば、よく理解できる心境の変化といえるでしょう。

それから彼は国籍を捨てて、つまりもうオーストリア人であることをやめてイギリス人になったのです。よほどこの戦争がこたえたのだと思います。そしてイギリス外科学会ロイヤル・ソサイエティの会員になりました。この間に彼はヨンケルの吸入麻酔器という、これはかなり有名なのですが、(日本でも戦前まで医療器械のカタログに載っていたという)クロロフォルムの麻酔器を発明しています。

余談ですけれども、この頃イギリスでは、お産のとき高貴な人は必ず麻酔をかけたものでした。例えばビクトリア女王は6人子どもを産んだのですが、そのほとんど全部に麻酔をかけて産んでいたという時代です。ちょうどその頃、彼はすぐ新しくて注目される研究をやっていました。

このイタリア統一戦争が終わって退役した後、彼はライプツィヒ大学に所属するようになっています。当時ライプツィヒ大学は医学に関してヨーロッパ随一の大学でした。アメリカでも一部で医系の大学は創られ始めていましたが、それら諸大学は創設後も日が浅く、いまだ僻地の新設大学と看做されていた時代です。彼は、そのライプツィヒ大学の教授会の推薦を得て日本に来たのです。彼の経歴から見て、生まれはオーストリアで文系の学位も持っているような人ですから、ドイツ語、オランダ語、フランス語、イタリア語、英語、ギリシャ語、ラ

テン語、などはかなり自由に使えたであろうし、また日本語の習得ぶりも驚異的でした。3年半しかいなかったのに、茶会のしつらえについての詳しい解説とか、「街頭で講釈師がこんなことを言っていた」というようなことの書き書きを書き下してドイツ語でレポートを作るとか、あるいは謡曲「鉢の木」をドイツ語に訳したり、歌舞伎の「忠臣蔵」の台本も訳すなどして、ライプツィヒの書店から流麗なドイツ語で出版しました。有名な文芸評論家のシェラーが「これは素晴らしい名訳だ」と激賞したというほどの国際的評価の高い文学者でもあったのです。

しかし残念なことに、当時彼の周りにいた日本人は彼のこの教養がよく理解できなかったと見えて、「彼は日本のこと興味がない」とか「文化人ではない」とか言っている人もいたのですが、実はそれは完全な誤解でした。というよりも、彼の凄さがよくわからなかっただけのことです、事実は、日本文化をこよなく愛していた抜群の文化人だったということが最近、奥沢康正先生と麻酔科の藤田俊夫先生お二人の研究で詳しくわかつきました。

しかも、彼には間違いなく優れたアドミニストレーションの力もありました。日本へ来たのは9月ですが10月にはもう新しい西洋風の病院の重要な規則を作り上げています。これが(図2)その内の一つの條則ですが、壬申(じんしん)とあるのは明治5年のことです。周りにドイツ語のわかる日本人がほとんどいなかったときに、日本語でこれを作り上げているというのは驚きです。

ちょっと読んでみますと、「療病院治療條則。第一章、治療を乞うの順序」。この章の第一條では「この院に来たりて治療を乞う者は、玄関にて当直医に申達すべし」。第二條は、「この治療を乞う者の姓名、年齢、住所、職業、病歴等を一紙に記載す。この紙をカラシケン、カルテーと言う」。カラシケン、カルテー。実は世界でこういう表現が現れたのはここが初めてです。ドイツへ行っても、アメリカ、イギリス、オランダへ行っても、病歴を記載した紙をカルテと言っているところはどこにもありません。

そして、全ての情報をカルテに集約して、患者に持たせて、「教師は」と述べて、療病院が医学校兼教育病院であることを明確

にしています)「病者を診察して、このカラシケン、カルテーに、病状、処方等を記して渡すべし」。「右のカラシケン、カルテーを病者、あるいは、その付き添いは薬局に持参し、薬料を納むべし」。「薬局にてカラシケン、カルテーに記する薬方を調合し、服用、用法等をことごとく口述し、あるいは記載して、薬に添えてこれを持参の者に渡し、カラシケン、カルテーは写し取り、薬局に納めて、原書は収集後、その日の当直医に渡すべし」ということで、実はこの「カラシケン、カルテーこと、クラシケ、カルテ」は140年たって日本全国津々浦々のどんな小さな病院までも広がったカルテの源泉でした。カルテKarteは、英語ではCardですから、

第一 章 治療ヲ乞フノ順序		壬申十月
第一條	此院ニ來リテ治療ヲ乞フ者ハ先玄關ニテ當直醫ニ申達スベシ	
第二條	當直醫右ノ治療ヲ乞フ者ノ姓名年齢住所職業病症等ヲ一紙ニ記載ス此紙ヲカラシケルト謂フ番號ヲ付シ之ヲ病者ニ持シノ又同番號ノ鑑札ヲ併リ共ニ之ヲ渡シ診察局ニ誘引シ教師ノ診察ヲ受シム	
第三條	教師病者ヲ診察シテ其カラシケンカルテニ病状處方等ヲ記レ渡スベシ	
第四條	右ノカラシケンカルテニ病者或ハ其附添人薬局ニ持參シ薬料ヲ納ムベシ	
第五條	薬局ニテカラシケンカルテニ記セル薬方ヲ調合シ服法用法等ヲ悉ク口述シ或ハ記載シ薬ニ添テ之ヲ持參ノ者ニ渡シカラシケンカルテハ寫シ取り薬局ニ收メ原書ハ取集メ其日ノ當直醫ニ渡ス可シ	

●図2

これを現代風に直訳すれば、「患者カード」というところでしょう。

話は変わりますが、最近、カルテの由来を研究した方が何人かおられて、異口同音に「いくら調べてもカルテというのは日本以外に世界中どこにも例がなく、そのルーツがわからない」と言っておられるのですが、この條則を見ると、明治5年に、そのルーツの非常にはっきりした証拠が残されております。

それで、もうちょっと、彼が来た当時の府立医大の前身である京都療病院の開所式がどんなものだったかというのがわかる書類がありますので、紹介したいと思います。明治5年11月に、粟田口に療病院が開かれました。そして京都療病院新聞の第1号が出ました。実はこの新聞は第4号まで出て、それからもうなくなっています。実質は、号外のようなものですが、これが第1号です。

第一ページは、オープニングの記事から始まります。「11月1日に療病院開業の式を行う。知事・参事を始め、およそ当院のことにある者は皆これに臨む」。「院内六室あり、もって式を行うところとす」。「第一室の北に列する者は、知事、長谷信篤。参事、槇村正直。権参事、馬場氏就。七等出仕国重正文…」続いて「十等出仕明石博高。権大属(ごんのだいのさかん)渡忠純、少属高瀬成」。それから権少属の青木義権という人が続くのですが、彼はかなりドイツ語ができたらしく、少し後でヨンケルの演説の通訳をしています。

それから出席者名がずっと書いてあって、「南に列する者。医学教師、ヨンケル・フ

ォン・ランゲック。欧学教師、ルドルフ・レーマン。ドイツ国、カルル・レーマン。」と続きます。このカルル(ルドルフの兄)が大阪の川口という所でレーマン・ハルトマン商会というのをやっていて、大砲とか鉄砲の輸入の総元締です。実は、後に新島譲の妻になる八重が持っていた鉄砲というものは、彼らが輸入したものでした。山本覚馬がその日本の窓口。そしてドイツ側の窓口は、このレーマン・ハルトマン商会でした。続いて当直医が紹介されます。前田松閣とか、江馬権之助とか、小石中蔵とか、新宮涼閣ですとか、安藤精軒。この安藤精軒という人は実は先代も有名な種痘医の家柄の人で、この人が、後で出てくる京都牧畜場の牧場長に任命されている医者です。なぜ医者が牧畜場の長に任命されているかというと、維新後、大量の天然痘用のワクチンを作るための牧場を明治政府が日本で初めて、種痘経験の豊富な京都に造ったからです。彼はワクチン製造の主任でした。この件は現在、農水省や京都府に問い合わせても、政府としては新冠(ニイカップ)牧場を造ったのが日本で一番早いという返事しかありませんけれども、緊急にワクチンを作るために、日本でまず最初に医薬製造用牧場として造られたのがこれです。

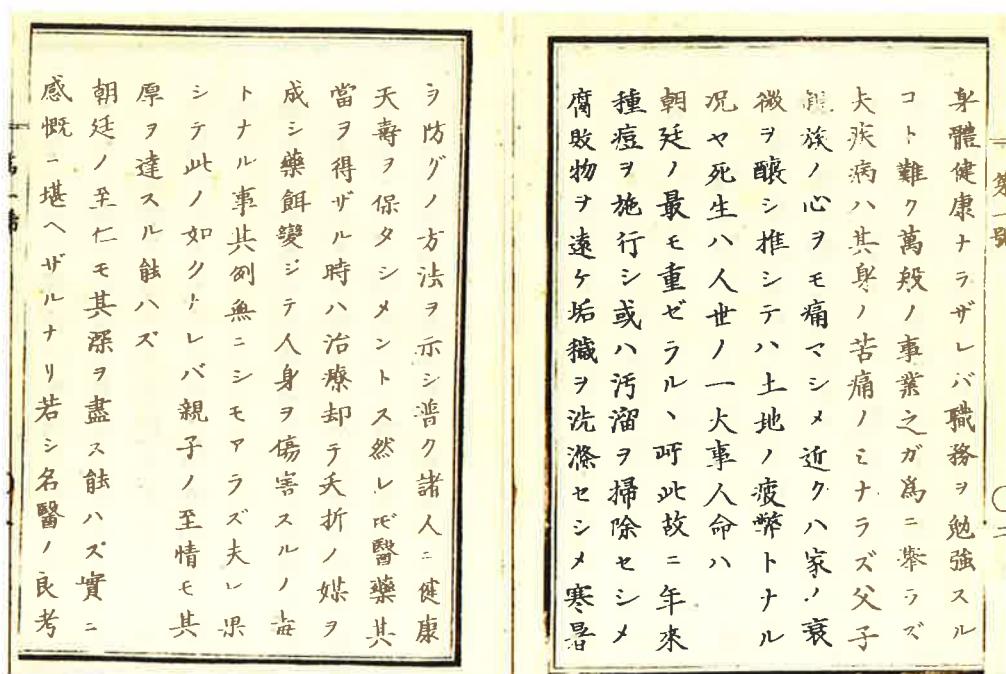
ともかく、「第二室より第六室まで判任官および等外役員(及び何々部長やら何々区長やら)」がずっと列席して、さらに「当院建築建営のため、金穀器財をもって費用を助くる者、これに団集(いしゅう)す」、とあります。「一室は、第一室の北にありて、書籍、器械を陳列する」。これはレーマンが京都府

のために輸入したドイツ製の器械や書籍で、明治初期に、島津源蔵も（島津製作所を創った人ですが）こういうものを見て勉強し、京都府のために理工学器械の製造請負を始めたという記録が残っています。「第二室の中央に高机を置きて、北に大監察木村文郷あり、南に明石博高あり」、楨村参事（現在いえば筆頭副知事）は西に向かつて当院の設置の趣旨を次のように説明したとあります。

この演説は非常に含蓄があるものでした。どういうことを言ったかというと（図3）「身体健康ならざれば、職務を勉強することも難く、万般の事業、これがために挙らす」。「それ、疾病はその身の苦痛のみならず、父子親族の心をも痛ましめ、近くは家

の衰微を醸し、推しては土地の疲弊となる」。「いわんや、死生は人生の一大事。人命は朝廷の最も重んぜらるるところ」と。それで「今迄も種痘を行い、汚溜を掃除せしめ、腐敗物を遠ざけ、垢穢を洗浄せしめ、寒暑を防ぐの方法を示して、普く諸人の健康天寿を保たしめむとしてきた」。これまで、そういう衛生的なことを重点的にやってきた、と述べています、予防ということが大事だと言っているわけです。

続けて言うには（図4）「眼前的疾病を療するのみならず、あらかじめ患害を未萌に」、ここで未萌と言っていますが、つまり未然に、防いで、「人々をして、疾病の苦しみを知らないようにさせる方法が、必ずやあるに違いない」、ということで、「ここに陰



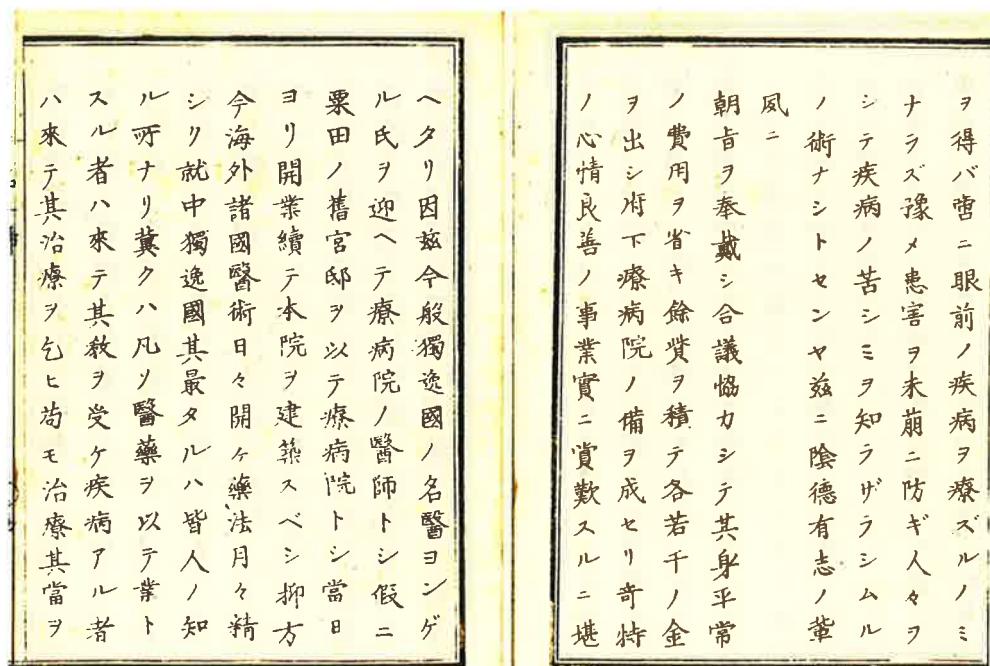
●図3

徳有志の人たちが集まり、合議協力して、その身、平常の費用を節約し、その余剰金を積み立て、夫々若干の金を出して、療病院の備えを出した。そんな皆さんの淨財でこういうものができたのだということを言って謝辞としています。

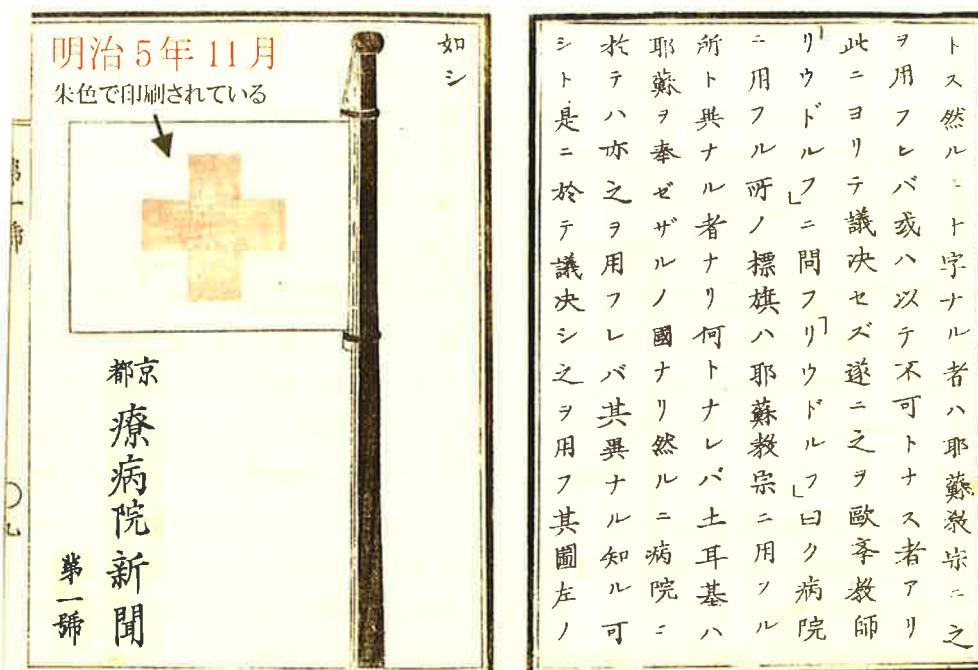
このようにして、演説の紹介が終わると、記者が、新たにできた療病院についてレポートする記事になります。まず、どんなところにできたかというと、「粟田口の旧宮邸の、門跡寺院（青蓮院）の中に開設され」、「南隣は知恩院なり」。次に、「前日、その知恩院内の竹藪を切り開いて療病院に通じる道を一挙に造った」という記事が続きます。

ここから、とても興味ある議論を報じています。日付は明治5年ですけれども、「か

ねて聞く、病院の標旗は西洋諸国大概十字を用う。標旗にこの十字あるとき、人、必ずその病院たるを知る」。「ゆえに、両敵相争うときといえども、その標旗あるところは相進撃せず。今、当院を設置するにより、またこれを用いんとす」。「(ここから図5になります)しかるに十字なるものは耶蘇(やそ)教宗にこれを用いれば、あるいはもって不可となすものあり」。というのは、この療病院は京都の有名寺院がお金をして成ったわけですから、スポンサーとして当然強い発言権があって、耶蘇教の旗を使ってもらったら困るということだったのです。それで、「議決せず」。ということで、その会議は頓挫し、提案は否決されそうになったというのですが、これを欧学舎教師ルドルフ・



●図4



●図5

レーマンに訊ねたところ、「ルドルフいわく、病院に用いるところの標旗は耶蘇教宗に用いるところと異なるものなり」と答えたというのです。「何となればトルコ国は耶蘇を奉ずることなき国なり。しかるにその国の病院においてもまたこれを用うれば、その異なるを知るべし」。「これによって議決し、これを用う。その図、左のごとし」というふうに経緯が報じられ、この色刷りの図(図5)が付いています。

興味のあることに、実はほとんど同じ議論が、明治20年に国際赤十字支社が日本に設立され、その4年後に日本赤十字新聞の創刊第1号が出たとき、その一面の冒頭に出ています。トルコの例を引きながら、「だから赤十字の十字を白赤が使うがこれは耶蘇教のものではない」という結論が強

調されています。京都府では明治5年に既に全く同じ議論があったわけです。

今でも、この現場に行っていただいて、青蓮院で山内の右側の階段を上がってもらうと、正門の傍らに碑が立っています。かつて、そこのところに旗竿を立てて、赤十字の旗を翻翻(へんぱん)と翻したのが明治5年11月でした。ただ、それも明治政府に無許可で勝手にやれるわけではないので、政府に慎重に伺いを立てている文書が残っています。

以下がそのお伺いの文章です。

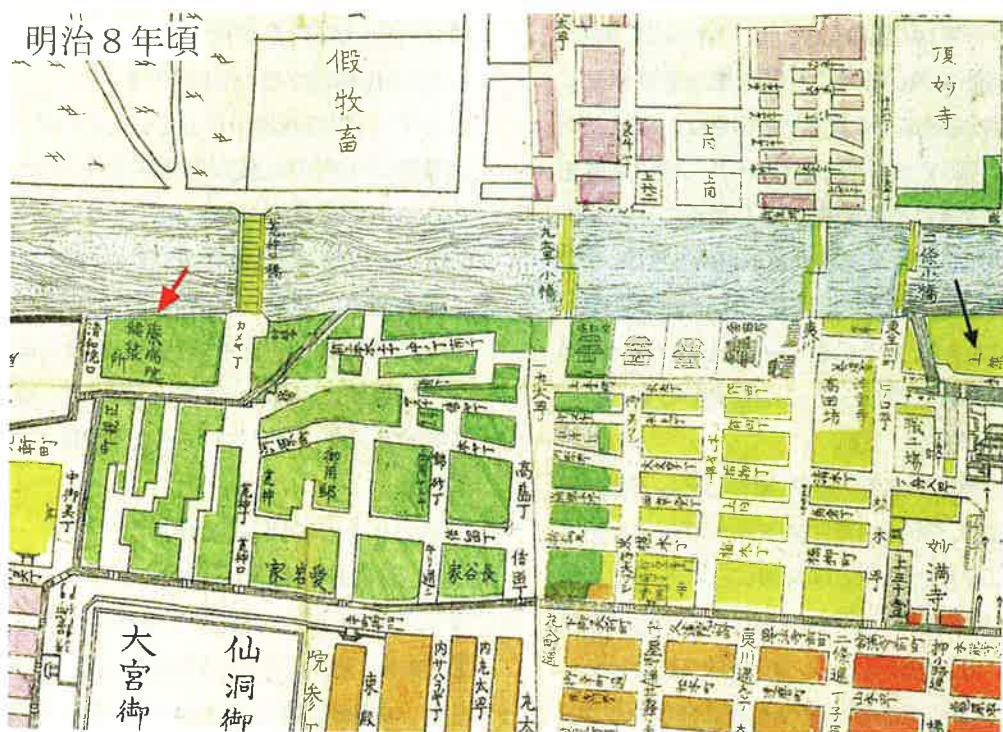
「当院標旗の議、別紙図面のとおり」。上記の旗の図がそうです。「万国普通療病院旗、旗章1旗、ならびに当府旗章1旗。都合2旗、当院前に建営これありたく伺い奉り候」というのが主文です。「追って、万国普

通療病院旗章の、あるいは耶蘇教宗に基づき候標の趣、風評これあり候えども、全くこの宗教により候儀これなく、既にトルコ国のごとき耶蘇教にこれなき国においても同様記章相用い候の趣、欧学舎教師ルドルフ氏申し出で候。よっていさかも書面の標旗、はばかり候儀これなしと存じ候」。

という文面で、療病院が政府に伺いを立て、よろしいという「聞き届け候こと」という返事が壬申10月14日に来て、このときから療病院のシンボルマークおよび京都府の医学のマークは公式に赤十字になりました。そして、京都の医師の免許証も十字の入った銀メダルになったのです。

一方、これ(図6)は、ちょうどヨンケルが

在任していた頃(明治8年)の荒神口橋から二条(小)橋までの一帯を含む地図ですが、彼は鴨川畔(右端の黒い矢印のあたり、木屋町通二条下ル上梶木町十九番地)に官舎を与えられ、そこから青蓮院まで人力車で通っていました。官舎から北(左)へ行った所に「療病院建築所」(赤)と書いてあります。そして川向こうに「假牧畜」というのがあって(現在は京都大学が建っていますが)ここに牛が飼われてありました。牧場長は種痘医の安藤精軒でした。そこで天然痘予防のためのワクチンが大量に作られました。そしてそのワクチンは全国各府県に配布されて、流行し始めていた天然痘の予防に役立てられました。



●図6



●図7

白イ門

1920年頃

到着直後から、ヨンケルは、ここ(↓)においてながら、ここの「療病院建築所」に建つべき新しい療病院の設計を任せられていたのです。彼は最後にライプツィヒ大学におりましたから、頭の中にはライプツィヒ大学の建物が念頭にあって、図7の版画の建物は建築当時からのものですが、これがライプツィヒ大学の臨床棟の設計と非常に似ているという考証がその後に行われております。この建物ができあがったのは明治13年ですので、設計が始まってから足掛け9年もかかって建築が行われたということになります。ちなみに、竣工式に立ち会ったのはライプツィヒ大学からヨンケルの後任として招かれていたショイベ(東大へ來ていたベルツと同じ内科教室の4年後輩)でした。

ヨンケルは京都府の医師免許制度も発足させました。この写真(図8)に写ってい

るメダルは明治8年に京都府が初めて医師試験を実施したときに、合格した人に与えた医師免許の銀メダルです。十字のマークが、でかでかと使われております。もちろんこれは日本政府の許可を得て使用しているのですが、京都以外で、こんなに早く使われた形跡はありません。全国に赤十字が広まるのは明治20年、日本に国際赤十字支社が設置されてからです。

赤十字のマークは、府立医大創立時点では京都府と明治政府の正式認可を受け、明治5年以降も引き続き付属病院(明治・大正年間を通じ療病院と呼ばれていた)のシンボルマークとして使われていました。療病院は長い間、日本で最初のそして唯一の赤十字を掲げた病院であったのです。百年もたってから、その考古学的証拠が出てきました。この図8の左にあるのがそのランタンです。



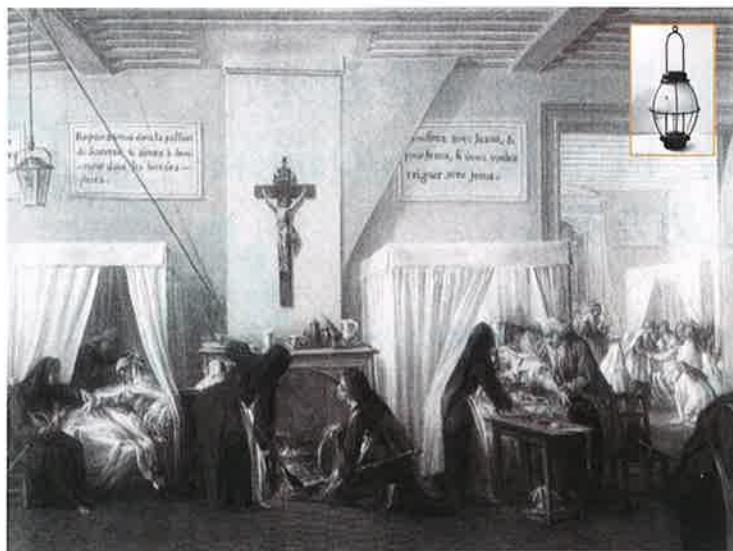
●図8

1970年頃、大学紛争が収束したとはいえた未だ不穏な空気も漂っていた学内の警備のため、学生部長として日課になっていた無人の旧館病棟の巡回をしていますと、廊下の隅に積み上げられたゴミの中から赤十字マークが浮き彫りにされ、療病院というサインも入った、使い古したランタンが二つ顔を出しているのが見つかりました。私は、捨てられる運命にあったこのランタンを拾つて府立医大図書館2階にある資料室に收めることにしました。現在も展示室で公開しているランタンがそれ(図8左側)です。

ランタンが日常使用されていたのは、当然、電気が来ていなかった明治24年(1891年)以前ですが、このランタンはかなり洗練された作りになっていて、ガラスの一枚ものの成形で、上半分がすりガラス、下半分が透き通っています。かなりの技術が要ったはずですが当時ガラス加工の名人と評判の、

初代島津源蔵(1839–1894、天保10年–明治27)が作ったと推定できる、芸術的とも言ってよいガラス細工です。

こういうランプはどのように使われていたかというと、図9はちょうどナイチンゲールがいた時代のヨーロッパの病院ですが、京都府療病院でも明治5年開学以来、当初の二十年間以上は電気が来ていなかったですから同じようなものだったと思います。蹴上(けあげ)の水力発電所が京都に初めてできたのが、明治24年。それから1~2年たって、やっと市内中心部のほぼ全域に電気を引くことができるようになったので、それまでは、蒸気機関で回す発電機によって点燈する大掛かりなアーク灯が、見世物的には存在してはいましたが、簡単に点せる電灯のようなものはまだ実用化されていませんでした。だから、このランプも多分、病院内でこういうふうに使っていて、天井から吊るしていたのでしょう。また、夜、



●図9

患者さんを見て回るのも、このランプは手で持つのに非常に便利にできています。しかし考えてみると、こんな時代にも、昼

夜分かたず医療に専念してきた医師や看護婦がいたわけですが、その苦労が、今は、しみじみと忍ばれます。

### 参考文献

- Jean-Henry Dunant : Un Souvenir de Solferino. 1862. アンリ・ジュナン著、木内利三郎 訳：赤十字の誕生—「ソルフェリーノの思い出」— 白水社 刊、1959。
- ヨンケル著、奥沢康正 訳：「外国人の見たお伽ばなし」、京のお雇い医師ヨンケルの『扶桑茶話』。思文閣出版、1993. {後半にヨンケルについての詳細な研究と資料が掲載されている。}
- 「島津の源流」。島津製作所 刊、平成8年。
- 宗田 一：日本医療文化史。思文閣出版、1989.
- 京都府立医科大学80年史。昭和30年(1955)。京都府立医科大学 刊。
- 京都療病院新聞第1号。書籍会社、大黒屋太郎右衛門 刊。明治5年。

藤田 哲也 (ふじた せつや)

昭和30年 京都府立医科大学卒業。昭和38年～昭和41年 米国パーデュ大学助教授。昭和42年 京都府立医科大学（病理学教室）教授。昭和43年～昭和44年 米国カリフォルニア大学SanDiego医学部教授。昭和52年 朝日賞受賞（神経細胞発生の研究）。昭和63年 京都府立医科大学長。平成3年 島津賞受賞。平成7年 京都府立医科大学定年退職・名誉教授。平成7年 勲二等瑞宝章受章。平成8年 紫綬褒章受章。平成15年 旭日中綬章受章。日本癌学会名誉会員、日本病理学会名誉会員。

# 「低線量放射線を超えて： 福島・日本再生への提案」 に込めた想い

（財）ルイ・パストゥール医学研究センター

宇野賀津子



## 「低線量放射線を超えて」を出版して

2013年の7月31日に、『低線量放射線を超えて』（小学館新書）を出して、はや4ヶ月が経った。当初の考え方通り、印税分を本に代えて、福島の講演した先の公立学校の先生や保健師の方々、福島でお世話になった自治体の方々には差し上げた。講演がより良くわかったとの声とともに、福島の方からの「元気づけられた」との声はうれしい限りである。

また、京大の先輩の名誉教授の方々には、よく書いたね、よく勉強したねと、ほめられた。どちらかと言うと、多くの場合は厳しい言葉が返ってくるだけに、放射線生物学や分子生物学専門の名誉教授からのお言葉はうれしい。最初、本を出したいといふかの出版社にあたったが、編集者は興味を持つてくれても今更放射線の本は売れないと編集委員会を通らなかった。ちょうどそのとき、小学館の相賀社長に会う機会があり、直接お願いして、必要な本は採算度

外観で出そうと言ってください、実現した（12月初めの現在8000部のうちのかなりの部分が売れて、採算ベースでは一応の義理は果たしたかなというところである）。

また、今回、原子力を専門とする方や材料学を専門とする方々から共感したとの声とともに、よく書かれましたねと、メールやお手紙をいただいた。これは予想外のことでの、また本を縁として、今まで全く出会う事のなかつた方々との議論を楽しんでいる。

## なぜ低線量放射線？

なぜ、私が低線量放射線の影響について語り、今なお毎月のように福島を行っているのであろうか、私自身が不思議に思う事さえある。エイズ騒ぎの時もそうであったが、当センターがHIVウイルス発見者のL.モンタニ工との縁が深かった事も活動をしやすく述べた。そのうちに、当センターが外国人患者も受け入れていたことから、エイズ医療体制の確立の研究班で外国人医療に

係ったことは、予定の範囲外だった。

3.11当時を振り返ってみると、地震、津波、原発事故の映像に釘付けの数日間を過ごしながら、何かしないと、と思い、実験も手につかなかった。それならばと、友人の坂東昌子氏（愛知大学名誉教授、元物理学会会長、NPOあいんしゅたいん理事長）と得た情報を交換した。二人のそれぞれのネットワークから得た情報を吟味し、確かなもの、役立つであろうものは、またそれぞれのネットワークに流すという作業をした。そのうちに、原発事故→放射線→がんリスクという内容が一番の不安原因であり、またその影響についての解説に首をかしげるものも多数見られた。さて、がんリスクとなれば今までの知識が多少は活かせると思い、自分にも出来る事があると思った。ネットやテレビを見ていると、放射線があたって、変異細胞が出来る。増殖中の細胞の方が放射線感受性は高いので、子どもは大人の数十倍もがんになりやすく、このまでは数年以内にも福島の子ども達が、次々とがんになってしまう、と言う人が多数いた。人のがんの成り立ちから考えて、それはなかろうと、それまでにがんの生きがい療法の講演で使っていたスライドをベースに、がんの成り立ちや、なぜ放射線ががんリスクをあげるのかを説明するスライドを作って、以前、この通信で報告したようにあいんしゅたいんのホームページから発信した。また、ちょうど研究が、多項目のサイトカインを測って疾患ごとの患者特性を見るような仕事にシフトしつつあり、炎症とりわけ加齢炎症には興味をもっており、色々調べる

うちに、低線量放射線の影響は、要するに加齢炎症ではないかと思うようになった。実際、広島・長崎の疫学でも、最近の報告にはがんはもちろんあるが、非がん影響として、加齢炎症の研究が進みつつある。ここでも加齢炎症なら、がんを予防する食事や成人病予防の食事が有効と思うにいたった。というわけで、抗酸化食で低線量放射線の影響を乗り越えようとなったわけである。そういった意味では、福島でお話ししていることはすべてこれまでの研究の応用問題だったわけである。

当センターにはがんの成り立ちを研究していた藤田哲也先生もおられ、研究所内のコンセンサスがあったこと、特に公益財団としての活動を問われていたときであったので、活動しやすかった事もある。

### 福島にて

2011年9月にJAからの要請や学術振興会（学振）の説明班チームの一員として、福島へ行った頃はまだまだ不安を抱えた人が、学習会に来られていた（1<sup>st</sup> stage）。それでも、学振の講演会以降地元では落ち着いた話が出来るようになったと言ってもらつた。2012年4月頃は、県庁へ行った時は女性議員から「今は、偉い先生に来ていただくなり、アロマの方が歓迎」と言われたほど、1年たっても県外へ出て行く方が増え、福島県としても危機感を抱いていた。そこで、昔おばあちゃんたちに化粧療法をして免疫機能（NK活性、IFN産生能）が上がる事を確かめたことから、化粧乳液

を用いたハンドマッサージを提案した。大阪市福島区にあるナリス化粧品が、昔の縁もあり、福島つながりということで、1万人分の支援用化粧乳液を用意してくれた。学振は「化粧、うーん?」ということだったが、日赤が被災者のためになることならなんでもOKと協力してくれた。ということで、2012年は色々な所でハンドマッサージやアロマを取り入れた(2<sup>nd</sup> stage)。心配しそぎるより、リラックスする方が、がんリスクも減るよ、というわけである。

そのうちに、抗酸化食を言う限りはもう少し一步進めてと思って、野菜や果物の抗酸化能を実感する実験を工夫した。イソジンを50倍位に希釀して、そこに野菜や果物の絞り汁を入れるだけの簡単な実験であるが、効果はなかなかのものでイソジンが瞬時に透明になったりすると歓声があがった。一番茶よりも二番茶の長く茶葉に浸けたお茶の方が効果が高いことも一目瞭然、今はお客様には二番茶を薦めている。お母さん、保健師、教員を対象とした所では特に反応もよく、可能な限りこの実験は講演のなかに組み込むようにしている。最初は研究室の角に眠っていた24穴のFalcon皿やピペットを持ち出して実験していたが、今は製氷皿やピルケース、お魚型の醤油入れや計量スプーンを100円ショップで調達してつかっている。福島では食品の放射線測定器が各地域に配備されていて、「自家製野菜はじいちゃん、ばあちゃんは食べても孫には食べさせられない!」ではなく、測って、大丈夫なら家族全員で食べようと言って、一定の共感を得た。

2013年秋には、福島では、2年経っても事故後心配されたようなことは起こっていないと、少し落ち着きを取り戻したように見える。しかしながら、県民健康調査、特に18歳以下の子どもの甲状腺検査の結果から、詳しい検査をすればかなり高い確率で甲状腺に嚢胞や腫瘍がみつかっていることから、瘤立てる人は、甲状腺癌が子ども達に高い確率で見つかっている、福島でももう原発事故の影響が現れていると声だかに叫んでいる。同じ時の新聞を比較したが、福島県の地元紙は冷静に書かれていたのに、中央紙はご丁寧に一部の研究者の、「明らかに高い確率!」というコメントを付けて報道している。どれだけあなたは調べて言っているの!と腹立たしく思った。

10、11月にはまた、保健師さん、学校の先生を中心とした研修会の講師をつとめた。私は2013年からは3<sup>rd</sup> stageと位置づけている。仲間内で教育できるピアエデュケーター育成である。私がお話できる範囲は知っている。話を聞いて確信を持った人たちが周囲の人にお話してもらわないと広がっていかない。

東京オリンピック招致の時は、猪瀬知事が「東京は大丈夫です」と言って福島の方々を傷つけた。なぜ福島もほとんどの地域は大丈夫と言わないのか。また国会議員の中には、福島は人の住む所ではないと言って反原発を言っている人もいる。まだまだ、福島の人々を不安にしたり傷つける発言が続いている。

エイズ騒ぎの時に京大のあるウイルス学の大家は、「1匹でもウイルスがいれば感

染の可能性はある」と言って、感染者を孤立させた。研究者としては一見厳密な言葉のようであるが、科学者としてきちんとリスク評価をした科学的な言葉ではない。今あらためて、科学者のあり方が問われている。放射線は低線量でも遺伝子を傷つけるからちょっとでも浴びない方が良いというのは簡単である。しかしながら、その結果避難地域が拡大され、それまで自宅で元気に畠仕事をしていた方々が、せまい仮設住宅で運動不足に陥っている。実際、避難の過程で亡くなった人が福島では圧倒的である（実際、避難関連死が福島では地震・津波による直接死（1599人）を最近上回ったと報告されている）。特に老齢者には、避難は慎重にならないといけないと意見もでてきている。

まだまだ福島では、保育園で外遊びをさせていないところも過半数であるとの事、その結果転び方を知らないと言った子どもが増えていると聞くと悲しい。実際、10月に訪れた福島市渡利の保育園では、9月に事故以降初めて、外へのお散歩にでることが出来たと、聞いた。保育園の先生方は、心配する親御さん達と議論を重ね、色々な検討をして、コースをえらび実現したとのことである。また、この保育園では、野菜・果物など抗酸化食の重要性を実験を交えてお話ししたが、「野菜不足による便秘の子が多い」との話に、心が痛んだ。事故直後ならともか

く、今の福島の野菜は、放射線量は基準値以下である。便秘や運動不足の方が、もつとがんリスクを上げるよ、リスクはトータルで考えないと！とお話しした。

何でも安全側にたっての発言は、あとで責任を問われないという意味でも科学者としては楽である。ぎりぎりのところの判断は、きちんと勉強していないと言えない。今回のようなシビアアクシデントの場合は、やはりその及ぼす影響についても多面的に考えて発言しなければならない。正義ぶつて、放射線はいくら低線量でも細胞を傷つけるなどと言っている方々に、ストレス、肥満、運動不足からくる炎症リスクや成人病リスクについてはどう考えるのと問いたいところである。

### 福島からのお客様

ある日、ルイ・パストゥール医学研究センターに、「10月末に京都へ修学旅行に行くが、その時最先端の研究が知りたいので、



●桂先生の講義を真剣に聞く福島高校の生徒たち  
(京大再生医科学研究所)

施設見学を許可してほしい」とのメールが福島高校の生徒から舞い込んだ。ちょうど福島へ行く機会があったので、夏休みのある日、福島高校へ出向き彼らの何人かと会った。聞くと、iPSについて知りたかったので、iPS研究所に問い合わせたが、1階のエントランスホール以外の見学は通常は難しいとの事で、当センターへ問い合わせたということだった。彼らの知りたい内容が、iPS、がん、治療ということと理解し、友人の先生方にお願いしたら、皆、「福島の高校生の夢を叶えることに協力できるなら!」と

二つ返事で協力いただけたことになった。そして、10月23日、iPS研究所エントランスホール→京大再生医科学研究所 河本研究室見学と桂名誉教授による「iPS細胞からがんを殺すT細胞を再生!」講義→京大南部生協での昼食→京大RIセンターでの角山先生による放射線障害による細胞の修復他の講義→iPS JapanにてiPS細胞の創薬研究への応用および研究室見学→ルイ・バストゥール医学研究センターで藤田先生によるがんの自然史の講義という豪華研究見学ツアーが実現した。講義した



●講義終了後に、熱心に質問（当研究センター）



●角山先生の講義（京大RIセンター）

先生方も、高校生とは思えない皆の勉強ぶりに驚いていた。後日、彼らからお礼の手紙をもらい、事故後消極的になっていた事もあったが、今回の出会いは「願えば叶う」ことを学んだと書かれていて、とてもうれしく思った。

### 福島からホールボディー検診車

去年、福島からの避難者の「ホールボディカウンター検査を受けたい」との要請を受けて、熊取の京大原子炉へ行きホールボディカウンター検査を実現した。これについては2012号の当誌で報告した。その後美浜発電所などでも同様の検査を受けに行ったが、いずれも職員の被曝検査用で、微量の体内の放射能汚染の検査には向いていないということもわかり、福島県へ行く度に、京都へも福島で使われている検診車を派遣してほしいとお願いしていた。

今、ホールボディカウンター検査をしても、事故直後の被曝の影響がわかるわけではない、それはわかっている、現在、福島県ですらほとんどの方が検出限界以下であ

る、それもわかっている。でもこれからの一歩としたい、福島県出身者は放射能汚染されていないことを明らかにしたい、そんな色々な気持ちで、ホールボディカウンター検査を受けたいとの声が私のところには届いていた。そして12月13日から19日に京都府庁で、20日から26日に兵庫県庁でと実現したのである。ルイ・パストゥール医学研究センターも、受け入れ支援の実行委員会の一員として活動。この通信が皆様の手元に届く頃には、福島からの避難者の方々も検診の結果を受けて、次の新しい一歩を踏み出すことができればと願わざるはいられない。

最後に「低線量放射線を超えて：福島・日本再生への提案」(720円+税)小学館新書、を紹介させていただきたい。下記の目次をご覧いただいたらわかるように、実は、これまでがんの生きがい療法やがんの再発を防ぐ食事などで紹介してきた内容がかなりの部分を占めている。そういった意味では、福島以外の方にもお役にたつ部分があるのであるのではと、自負している。

### 本の内容



- |     |  |
|-----|--|
| 第1章 | 3.11、地震、津波、そして福島原発事故が起った<br>→ 研究者間で意見が分かれる理由 |
| 第2章 | 低線量放射線の影響 → 福島原発事故と甲状腺がんリスク ほか               |
| 第3章 | 生体が獲得してきた防護システム<br>→ 放射線によるDNA障害と修復システム      |
| 第4章 | がん化抑制の最後の砦～免疫<br>→ ナチュラルキラー細胞と発がん ほか         |
| 第5章 | 免疫力を上げる方法 → 食事療法、生きがい、笑いと免疫 ほか               |
| 第6章 | 勉強、そして科学的に考えよう → 疑似科学と陰謀説の悲劇                 |

# ベトナム・京都・工芸

塚本 樹

(美術史学会会員・朝日新聞社友)



日本とベトナムの交流は記録に残っているだけでも8世紀には始まっている。室町時代から江戸時代初頭にかけて、貿易が盛んだった。その後しばらく交渉は絶えて、太平洋戦争が始まる前の1940年に、インドネシアの石油確保を狙って、日本軍がフランスの植民地になっていた当時の印度シナに進駐し阮王朝を復活させ傀儡政権とし敗戦まで居座ったが、その後再び絶交状態になり、復活したのはベトナムが完全独立を果たした1973年のことである。

現在、日本の工・商業はベトナムに進出し盛況を見せているが、科学を含めた文化交流は寂しい限りで、小規模または単発的な接触はあっても、各国の文化の現状を総合的に発展を期するような——つまり交流と呼べるような活動は、私の知る限りではない。

「作家集団 工芸京都」は、世界に京都の工芸を広め、世界と交流し、共に物心両面の文化を発展に資そうと、2006年に結成

された団体で、京都を創作と発表の基盤にしている、世界的にもトップレベルと認められる美術家25人のほか評論・歴史家1人で構成されている。所属・技法・年代・肩書きの区別無く、良質の工芸を世界中に普及させ、物心両面の文化を向上させようという、同志的な結合によるグループである。代表は文化功労者・芸術院会員の陶芸家・今井政之、展覧会実行委員長を重要無形文化財保持者(人間国宝)・日本工芸会理事の村山明で、筆者は事務局長をつとめている。

2008年には日仏交流150年、京都・パリ友情盟約都市提携50年を記念し、実力に比してフランスで知られることの薄い京都の工芸を認識してもらおうとパリで展覧会を開き、まずはの成果を収めた。しかし、その後は展覧会活動を行わなかった。これは集団が展覧会目的のものではなく、存在理由は上記のようなものだから、展覧会を開くには“大義名分”が無ければならない。2009年から2011年までは、どうしても

展覧会を開かなければならぬような“名分”が見つからなかつた。また活動の自由を確保するため、できるだけ行政や特定企業・団体の経済支援を受けない事にしているので、開催資金を貯めるには時間がかかるからだ。ところが、2011年の後半になって、2013年がベトナムが完全独立を果たして日本と外交関係を結んでから40年になり、日本・ベトナム両国政府はこの年を「日越友好年」(越は越南の略でベトナムの古代中国風の言い方)として、各種の記念行事を募集している事を知つた。

京都は、中世において安南と呼ばれたベトナム中部の国と深い関わりがある。清水

寺には貿易船を描いた航海安全を祈る絵馬が奉納されている。輸入された交趾(コチ)焼も京の陶芸に影響を与えた。京都の工芸が、東南アジアの工芸大国と知られるベトナムと交流を持つには、絶好の機会である。急遽ベトナムでの展覧会開催を企画し、手探りで実行手段を模索し、現地在住邦人の協力を得て、2012年10月には2013年11月にハノイのベトナム美術館(Vietnam Fine-Arts Museum)での開催が決まった。それからは、かなりの糸余曲折を重ねながらも、11月11日の開会に漕ぎ着けた。開会式には深田駐ベトナム大使やベトナムの美術家や大学生ら約200人が

**BÁO ĐIỆN TỬ  
ĐẢNG CỘNG SẢN VIỆT NAM**

CỘ QUAN THƯỜNG ỦY QUỐC HỘNG CỘNG XÃ HỘI VIỆT NAM

Hôm nay, ngày 3 tháng 12 năm 2013

Tin tức | Quốc phòng | Kinh tế | Văn hóa | Xã hội | Quốc phòng-An ninh | Nội chính-Pháp luật | Khoa giáo | Văn học nghệ thuật | Thể thao-Du lịch | Quốc tế | Sự kiện, Bình luận | Bạn đọc

Thời sự | Chính trị | Xây dựng Đảng | Tư tưởng - Văn hóa | Xã hội | Quốc phòng-An ninh | Nội chính-Pháp luật | Khoa giáo | Văn học nghệ thuật | Thể thao-Du lịch | Quốc tế | Sự kiện, Bình luận | Bạn đọc

Phóng sự ảnh

Triển lãm "Tinh hoa mỹ nghệ Kyoto – Cố đô Nhật Bản" 2013

17.3 | 12/11/2013

(DCSVN) - Chiều tối 11/11, triển lãm mang tên "Tinh hoa mỹ nghệ Kyoto – Cố đô Nhật Bản" 2013 đã được khai mạc tại Bảo tàng Mỹ thuật Việt Nam, 66 Nguyễn Thái Học, Hà Nội. Đây là một trong những sự kiện diễn ra nhân dịp kỉ niệm 40 năm thiết lập quan hệ ngoại giao Việt Nam - Nhật Bản.

Triển lãm do: nghệ sĩ Kogei Kyoto (Nhật Bản) phối hợp cùng với Bảo tàng Mỹ thuật Việt Nam tổ chức thực hiện.

Triển lãm giới thiệu 50 tác phẩm của 25 nghệ sĩ và 1 nhà nghiên cứu lịch sử văn hóa thuộc Hội nghệ sĩ Kogei Kyoto. Đây đều là những tác phẩm thuộc loại hình thủ công mỹ nghệ - một nét giá trị văn hóa đặc sắc của cố đô Kyoto. Mỗi tác phẩm có chủ đề và phong cách riêng, được thể hiện linh活得 và sáng tạo thông qua nhiều chất liệu khác nhau.

TỔNG BIÊN TẬP  
ĐÀO NGỌC DŨNG

DƯƠNG DÂY NỒNG

- Điện thoại: +84 80 438181  
+84 80 438182  
0999.258.547  
0999.258.549  
0999.258.550
- Fax: 020 941173
- e-Mail: kyotoart@vietnam.gov.vn  
dangcongsan@vietnam.gov.vn

TỔNG BIÊN TẬP  
ĐÀO NGỌC DŨNG

ベトナムで開かれた「工芸京都」の展覧会を伝える、  
ベトナム共産党機関紙「ニヤザン」の紙面（デジタル版・部分）



展覧会オープニングのテープカット



会場の様子、向かって右端が筆者

参加して行われ、展覧会についてはVoice of VietnamでTV放映されたほか、ベトナム共産党機関紙『ニヤザン』(民衆)はじめ、デジタル版を含めて6紙に記事が掲載され、多数の市民の関心を呼んだ。開会式に参加した学生は日本語専攻生が多く、日々に「工芸を通じて、日本をより深く知りたい」と日本語で話してくれた。先ずは、展覧開催の目的の一端が果たされた訳だが、何よりの収穫はKOGEI(工芸)、URUSHI(漆)という言葉が、注釈つきではあるがそのまま使われ、京都の工芸のスタンダードが国際的に通用する足場を固めたことだ。

京都府・市は、最近ベトナムとの関係を深

めようとしている。府は京都大学・京都銀行と提携して、交流に乗り出したという。市は市長が古都・フエに深い関心を寄せている。ただ、こうしたムーブメントも、より多くの機関・団体・個人の共同が無ければ効果はあがらない。例えば工芸にしても、工芸家同士の交流だけでは技法の向上や、製法の改善ぐらいが精々で、一般大衆には直接関係しない。美術史家が文化財保護を訴えても、一般の協力が無ければ“空念仏”に過ぎない。その意味で、「工芸京都」は増やしに協力しようと思うが、工芸と医学研究が手を取り合うことも、考えられて然るべきだろう。

故岸田先生とのご縁で、幸いにも塚本さんからお誘いをいただき、今回的大イベントに同行させていただきました。

ベトナムといえば、アオザイにシクロ、のどかな田園風景にノンラー(円錐形の麦わら帽子)、ハロン湾などの世界遺産、フォーやベトナムコーヒー(ブラジルに次いで、世界で第二位の生産量)など魅力がいっぱい……、その反面、私たちは今までにどれだけ多くのベトナム戦争の悲惨な報道も目にしてきたでしょう。

ともかく、日本とベトナムの友好40周年を祝つて、京都の工芸を通じて平和的文化交流を図ろうなんて、何と素敵な催し! しかもその末席に加えていただき、観光も楽しめるなんてと、二つ返事で参加することを決めました。

開催地は首都のハノイ、ベトナムの北部に位置します。ベトナムは南北に細長い国です、ハノイは南部のホーチミンとは違った趣だということですが、旧市街のど真ん中にあるホテルから一歩繰り出すると、そこはもう別世界。迷宮のように入り込ん

だ小路小路、狭い通りに並ぶ店々の軒下で食する人、おしゃべりする人、そしてその横を歩く人もオートバイもごちゃごちゃになりながら、喧騒と躍動感の協奏曲……、ここでの約1週間が、私にとっての初めてのベトナム滞在となりました。

展覧会は、市の中心地にあるベトナム美術館で11月11日から23日まで行われました。私たち、オープニングレセプションに和服姿で参加し、この催しが多くの出会いと交流の場になることを祈って、まずは乾杯。

ご存じのように、ベトナムの人たちは刺繍や織物からも手仕事を得意としています。だからでしょうか、美術館に来られる人たちもことのほか、熱心に

京都工芸展を楽しんでいたように思われました。ここでは、展示された作品を手に取って見ることは当たり前のようで、誰もが自由に作品に触れているのには、内心ヒヤヒヤしながら、驚きました。

塙本さんが、オープニングレセプションの挨拶でもおっしゃっていましたが、「世界に誇る京都の工芸の繊細さ、優雅さ、美しさをこの機会に大いに楽しんでください」という思いは、来られた方々には十二分に伝わっていたように思います。私にとっても、京都の工芸をさらに身近に感じ、その魅力に堪能し、そして作家さんたちと一緒に過ごさせていただいた至福のときとなりました。

(当研究センター 津久井 淑子)



会場ポスター前で



展覧会のポスター



通りで、おしゃべりや食事を楽しむ人々



活気ある旧市街

## ■活動報告 [2013年1月～12月]

### ● 講演会

- 2013 1.21 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性:科学者として支援できることは何か』(第22回放射線利用総合シンポジウム、大阪)
- 1.25 谷川真理『管理職のメンタルヘルス』(職員研修会、精華町役場)
- 2.2 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性:免疫力アップの知恵袋』(伊達市)
- 2.16 藤田哲也『道徳を生みだした脳の進化』(府立洛北高校特別講義)
- 2.22 谷川真理『メタボリック症候群』(職員研修会、精華町役場)
- 3.4 宇野賀津子『低線量放射線と対峙して生きる-科学者として何が出来るか』(理化学研究所)
- 3.5 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響:これからの生活で変えられる!』(福島県立総合衛生学院特別講義)
- 3.24 藤田哲也『放射線とがん』(京都大学基礎物理研究センター)
- 4.4 藤田哲也『セシウム放射線の発癌性について』(第6回がんと認知症患者さんの在宅医療・看護を考える会、静岡)
- 4.22 藤田哲也『脳と心の健康』(同志社女子高PTAの会、京都)
- 5.24 谷川真理『新人のための職場のメンタルヘルス』(職員研修会、精華町役場)
- 6.1 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響:3.11以降の科学』(大阪府立泉北高校)
- 6.6 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性:科学者として支援できることは何か』(量子放射線利用普及協議会)
- 6.7 宇野賀津子『ママの元気アップ講演会:低線量放射線の生体への影響と食の重要性』(伊達市)
- 6.15 宇野賀津子『低線量放射線被ばくの生体への影響:これからの生活で変えられる!』(福島地域保健研究会、郡山総合福祉センター)
- 6.24 谷川真理『職場のメンタルヘルス』(職員研修会、精華町消防)
- 6.24 谷川真理『がんの早期発見と予防』(職員研修会、精華町役場)
- 6.29 藤田哲也『江戸時代末期の予防接種。その知られざる歴史秘話』(京都府立医科大学小児科学教室)
- 7.20 宇野賀津子 放射能に関する健康講座『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』復興「絆」水環境フォーラム(福島県国見町)
- 7.29 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』(公立学校共済組合職員研修会 福島支部 郡山市)
- 8.6 宇野賀津子 サイエンスカフェ『低線量放射線を超えて:福島・日本再生への提案』(東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻)
- 8.7 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』(公立学校共済組合職員研修会 福島支部 いわき市)
- 8.23 宇野賀津子 The effects of Low-dose Radiation on Humans and the Importance of Eating Wisely : Role of Scientists in communication the risk (京都大学 東アジアジュニアワークショップ)
- 8.23 谷川真理『女性のライフステージにおける心と体』(職員研修会、精華町役場)

- 8.31 藤田哲也『明治維新と日本近代医学のあけぼの一京都府立医科大学の創設をめぐってー』  
 (日本看護歴史学会特別講演、京都)
- 9.6 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』(福島学院大特別講義)
- 9.21 宇野賀津子『女性のための理系職業選択』(福井理科教育研究会 福井大学)
- 9.27 谷川真理『生活習慣を見直し健康寿命を延ばす』(職員研修会、精華町役場)
- 10.16 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』  
 (平成25年度 放射線健康リスク管理のための研修会 保健福祉関係者・教育関係者のためのフォローアップ研修 いわき・ら・ら・ミュウ いわき市)
- 10.23 藤田哲也『放射線で起ころがんとそのメカニズム』(福島高校生、当研究センター)
- 10.26 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』  
 (東京大学 川人ゼミ特別講義)
- 10.29 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』  
 (放射性物質と食の安全性について学習講演会～低線量放射線の影響と食の重要性～福知山市三段池公園内武道館)
- 10.30 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』(さくらみなみ保育園、福島市)
- 10.30 宇野賀津子『食品の抗酸化能を実感する実験』(さくら保育園、福島市)
- 10.30 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』  
 (平成25年度 放射線健康リスク管理のための研修会 保健福祉関係者・教育関係者のためのフォローアップ研修 会津若松)
- 11.8 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』  
 (平成25年度 放射線健康リスク管理のための研修会 保健福祉関係者・教育関係者のためのフォローアップ研修 福島市)
- 11.10 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』(公開パネル討論  
 「今やる、放射線教育」 NPO 法人放射線教育フォーラム 東京慈恵会医科大学)
- 11.19 宇野賀津子『ヒューマンセックショアリティ「女性とは何か」』(京都大学人間健康科学科特別講義)
- 11.22 宇野賀津子『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』  
 (平成25年度 放射線健康リスク管理のための研修会 保健福祉関係者・教育関係者のためのフォローアップ研修 郡山)
- 11.26 宇野賀津子 Reducing the Effects of Low-dose Radiation: the Importance of Immune Ability and Eating Wisely, (JICC Seminar, Shinagawa Conference Center)
- 11.27 宇野賀津子 『性差:生物学的・歴史的・社会的視点から考える』  
 (京都大学「偏見・差別・人権」特別講義)
- 11.29 長谷川武夫『ハイパーサーミアとは』(那覇医師会)
- 12.13 谷川真理『アンチエイジングのはなし』(職員研修会、精華町役場)
- 12.25 藤田哲也『脳のはなし』(府立洛北高校附属中学特別講義)
- 12.27 宇野賀津子 『低線量放射線の生体への影響と食の重要性』(郡山)

## ● 国内学会・研究会 他

- 2013 2.9-10 第15回癌増感研究シンポジウム(奈良)坂元直行、古倉聰  
 3.25 第83回日本衛生学会(金沢)内山巖雄、東賢一、谷川真理  
 4.12-14 第110回日本内科学会総会(東京)谷川真理

- 4.23 京都府医師会「中国におけるA(H7N9)に係る医療関係者研修会」(京都)谷川真理  
 6.4-6 第55回日本老年医学会総会(大阪)谷川真理  
 6.27-28 第22回癌病態治療研究会(東京)坂元直行、古倉聰  
 6.28-30 第13回日本抗加齢医学会総会(横浜)宇野賀津子、谷川真理  
 8.30-31 第30回日本ハイパーサーミア学会(横浜)長谷川武夫、坂元直行、古倉聰  
 9.20-22 第12回日本テレパソロジー・バーチャルマイクロスコピー研究会総会(東京)  
     土橋康成、津久井淑子  
 9.21-23 第68回日本体力医学会(東京)川合ゆかり  
 10.3-5 第72回日本癌学会総会(横浜)長谷川武夫  
 10.25-26 第19回MPO研究会(東京)宇野賀津子  
 11.5 「放射線の影響とクライシスコミュニケーション」に関する先導的研究開発  
     委員会準備会(弘済会館) 宇野賀津子  
 11.25 「放射線の影響とクライシスコミュニケーション」に関する  
     先導的研究開発委員会設立総会(弘済会館)宇野賀津子  
 11.27-29 第41回日本臨床免疫学会総会・第25回神経免疫学会学術集会(合同開催)  
     (下関)谷川真理  
 12.2 第1回赤十字原子力災害セミナー(日本赤十字本社) 宇野賀津子  
 12.3 学振「放射線の影響とクライシスコミュニケーション」に関する先導的研究開発  
     委員会第二分科会委員会 (東京大学)宇野賀津子  
 12.4 学振「放射線の影響とクライシスコミュニケーション」に関する先導的研究開発  
     委員会第1回研究委員会 宇野賀津子  
 12.11-12 第42回日本免疫学会(幕張メッセ) 宇野賀津子  
 12.13-16 We Love 福島プロジェクト京都府庁 藤田哲也、宇野賀津子  
 12.21-23 We Love 福島プロジェクト兵庫県庁 宇野賀津子

### ● 國際学会・シンポジウム

- 2013 8.19-23 Environment and Health -Bridging South, North, East and West  
 Conference of ISSE, ISES and ISIAQ(バーゼル、スイス)内山巖雄、東賢一  
 8.23 The effects of Low-dose Radiation on Humans and the Importance  
     of Eating Wisely : Role of Scientists in communication the risk  
     (京都大学 東アジアジュニアワークショップ)宇野賀津子  
 9.29-10.3 Cytokines 2013: From Molecular Mechanisms to Human Disease  
     (サンフランシスコ、米国)宇野賀津子  
 11.7 国際シンポジウム-原子力と法制— INES-4 トピカルミーティング The effects of  
     Low-dose Radiation on Humans and the Importance of Eating Wisely :  
     Role of Scientists in communication the risk  
     (東工大蔵前会館・ロイヤルブルーホール)宇野賀津子  
 11.21-23 FMU-IAEA International Academic Conference -Radiation, Health and  
     Society Post-Fukushima Implications for Health Professional Education  
     (福島県立医大)宇野賀津子

## ● バイオ・ソサエティに関する事業

### バイオ・ソサエティ2013年度開催セミナー（公開）

#### ・医学入門講座12回実施

- 2013 8.1 ゲノム医科学 田代 啓(京都府立医科大学 分子医学教室ゲノム医科学部門教授)  
8.2 免疫学 松田 修(京都府立医科大学大学院医学研究科 免疫学教授)  
8.5 薬物動態学 掛見正郎(大阪薬科大学 薬剤学教授)  
8.6 脳の形態と機能の進化／脳をつくりだすゲノム機構  
藤田哲也(当研究センター 分子免疫研究所所長)  
8.7 臨床感染症入門 藤田直久(京都府立医科大学 感染制御・検査医学准教授)  
8.9 がん入門 三木恒治(京都府立医科大学泌尿器外科学教室・腫瘍薬剤制御学講座教授)  
8.21 臨床病理学 土橋康成(当研究センター 臨床病理研究部部長)  
8.22 臨床薬理学 中田徹男(京都薬科大学 臨床薬理学分野教授)  
8.23 薬理学 大熊誠太郎(川崎医科大学 薬理学教室教授)  
8.26 アンチエイジング学 木村 修(京都府立医科大学大学院 小児外科学准教授)  
8.27-28 統計学①② 八木克巳(当研究センター 主任研究員)

## ● センター活動

- 2013 1.7 仕事始め  
2.1 科学研究費補助金説明会参加(新大阪)  
2.15 京都市衛生局立入検査(分子免疫研究所)、西利工場見学  
3.6 食品化学新聞の取材  
3.22 仏リール大学より、リガール先生来訪  
3.25 第51回評議員会  
3.26 第68回理事会  
6.14 第52回評議員会  
6.17 第69回理事会  
6.27 公益財団法人移行認定申請書を内閣府に提出  
7.8-8.23 フランス留学生ピエールとローラ、同志社大学で研修  
7.10 科学研究費補助金説明会参加(関西大学)  
8.1 バイオ・ソサエティ医学入門講座開始(~28日)  
8.30 左京消防署による設備点検  
9.26 内閣府より公益財団法人移行に関する答申  
10.23 福島高校の生徒6名来所、最前線の研究見学ツアーリー<sup>1</sup>  
11.18 アリメント工業(株)見学  
12.18 京都パストゥールビル総合消防訓練  
12.19 東映(株)による取材  
12.27 仕事納め



## フランスからこんにちは！

こんにちは、フランスから参りました、パンソン・ピエールアドリアンと申します。リール第1大学で生物学を勉強しています。

フランスで日本語を学び始めましたが、初めて日本に来るきっかけは2年前、2011年7月と8月に、京都府立医科大学でインターンシップをするためでした。それがとても勉強になった経験で、2011年9月から2012年8月まで



日本(沖縄)で語学留学することに決めました。そして、2013年7月と8月に同志社大学でインターンシップをしました。今回は同志社大学の生命医科学研究科の生体情報研究室のコウモリ班で日本の学生と一緒に様々な実験に参加することができました。

おもしろい科学の勉強だけでなく、日本語の勉強になりました。そして、日本の学生たちとの日本での大学生活は興味深い経験となりました。

お世話になった人たち、先生と生徒の方々に心から感謝しております。どうもありがとうございました。

パンソン・ピエールアドリアン



7月初めから8月末まで京都に滞在し、同志社大学、生命医科学部で「生理活性有機化合物の効率的合成法の研究」を行いました。大変興味深く楽しかったです。

京都はとても美しく、また訪れたいところです。そして日本や日本の文化にも感動しました。学生たちはみんな親切で、今でも何人かの学生たちと連絡を取り合っています。

日本が大好きなので、また来て、いろいろなところに行つてみたいです。

ありがとうございました。

ローラ・ギグ

募金ご協力者

2013年度

出口 紅様

どうもありがとうございました。